

佐藤正明論序

現代作家研究としての美術史的解釈の意義

守屋正彦

佐藤正明（一九四〇～）は七〇年代のアメリカ現代美術界に「穴のシリーズ」（あるいはサブウェイシリーズ、挿図①）で新しい表現を示し、一躍その名を知られることになった作家である。七〇年代にニューヨークに在住し、八〇年代以降は「ニューススタンドシリーズ」（挿図②）を発表して現在にいたっている。作家を知る最も新しい情報は二〇〇〇年九月四日から十月七日まで東京で開催した「佐藤正明・ニューヨークでの三十年 1970-2000」展の折に出版された同名のカタログである（①）。アメリカ滞在三〇年を区切りとして編集された本書は、作家のこれまでについての履歴をドキュメントに捉え、作家研究のための充分なテキストとなっている。その中に彼を論評した「文献」が編年的に記録され、これにより作家の成長を確認することができる。本書に収められた「文献」は図録、新聞・雑誌に大別され、内容は評論と記事に分類できる。これらは彼のその当時における評価や履歴として貴重であるが、いまだ「文献」には彼を美術史の中に位置付ける試みは示されていない。

最も現代作家の研究は、わが国の場合、妙な慣例が支配し、一般的な美術史の取り組みとしては、作家が鬼籍に入る頃、あるいは亡くなって、時が経過してか

ら行われることが多い。ただ、それは美術史のカテゴリーに加えるべき要素について、時の経過を待つ方法を取って来たことを常識としたからにはかならないが、しかし彼のように、すでに評価の行われている作家を研究の対象とする場合には適切ではない。同時代に作家と交渉することで獲得したドキュメントはその時代の彼にかかわる全ての文献を渉猟することに加え、彼自身の言質を確認することが可能であり、敢えて言うならば「本質的な」作家論を風化させない点においても十分な意義を認めることができる。

時の経過は、ある意味では作家評価においては客観視できる場合もあるが、しかし、そのことが作家研究のための多くの情報を失うことであるならば、それは妙な慣例が研究の支障になっているといえるのではないだろうか。同様の意識はわが国の「回顧展」といわれるものにも働いている。作家が生存している間に行う個展でも「回顧展」は功なり、名を遂げ、長い時間を経てふり返ることを意味している。ただある時期までの制作を一括して回顧する場合は、我が国では、このように言わない。

「回顧展」を美術館が行う場合となると、その折に発行したカタログには作家の

言葉を掲載し、また展覧会用の作家解説を載せる。それはドキュメントとして、かつての評論や記事を抄録したり、引用して解説としたもので、本質的な作家論を示しているとはあまり認めがたい内容であることが多い。作家のこれまでを集大成したカタログは、作家研究にとって、きわめて重要な文献であるが、多くのカタログ制作は傍観者的で、彼を論ずるにあたり、評論あるいは作家論も、かつての記事を引用し、またそれぞれの作品が制作された当時の美術運動や社会事象、彼が所属した会派の動向などを織り交ぜ、構成している。この作家論は彼を美術史上に加えるべき主張として、膨大な資料を援用することで、その位置付けを行ったと見ることが出来る。ただ、この場合は作家論として、執筆者による本質を思惟した解釈が示されたとは言いがたいのである。それは歴史的な、時を経た作家をとりあげて、研究、考察、論評する場合と同様に作家のあるべき状態を暈してしまふ。さらに悪い事には歴史上の作家を研究する場合に示される、作家解釈のための仮説さえ示されていない。作家を解釈するにあたって、その解釈のキーとなる仮説を論証することは、多くの場合、現代作家では行われていないのである。ただ、作家に直に論ずるべき仮説を示し、これを美術史上の証左として示していくことができるものと考えるのである。

私達が佐藤正明という現代作家を美術史的に取り上げる意図はまさにこの点にあり、彼の作品に日本的な造形概念を認めたからである。ただ、これを論ずるにあたり、これまでの政策を編年的に捉え、作品を生み出した彼の意図について知る必要があった。そしてこのことは、作品が成立していく過程を承知することであり、十分にこれまでの文献が示しているものではなかったのである。

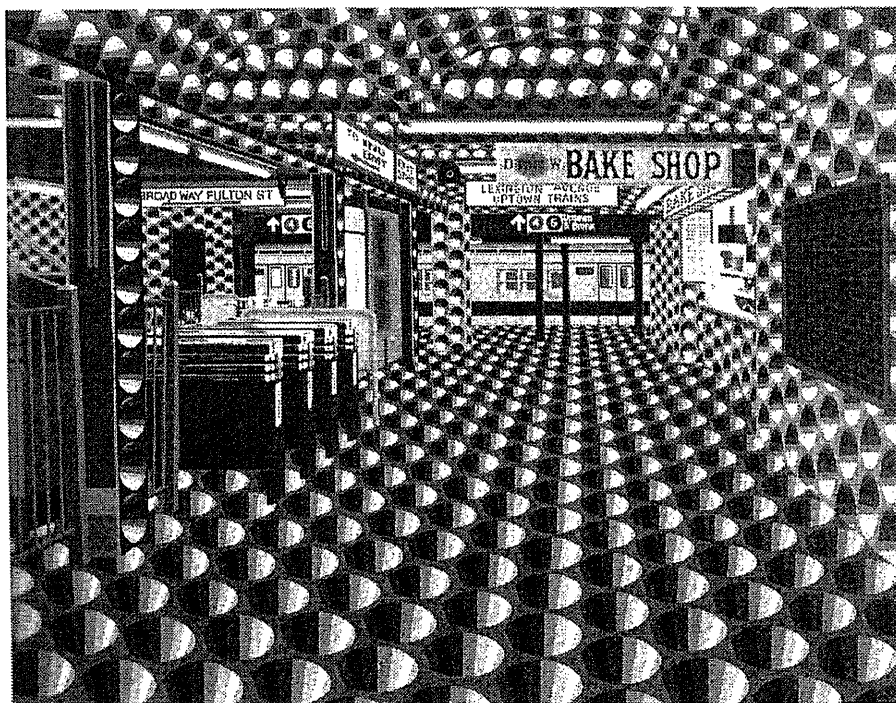
例えば、個々に解釈を加えるべきテーマの一例を取り上げ、同時代作家研究の美術史的に考察する方法を考えたい。佐藤正明はこれまでに大きくは冒頭に挙げた二つのシリーズを完成させている。この二つはいずれもアメリカにおいて高い評価を受けるが、編年としては「穴」のシリーズを経て、「ニューススタンド」を制

作。それが今日に継続している。この「穴」のシリーズが成立する依然、あるいはどうシリーズが評価される以前については、渡米以前におけるイギリス滞在時代の制作、またブルックリン美術学校時代における制作を考察する必要がある。この二つのシリーズの本質的な因子、言い換えるならばイギリス時代に形成されていると見なすことができる。ただイギリス時代がそれほど重要としてこれまでのカタログ、または文献の上で語られてきたわけではなかった。ここにイギリス滞在の意味と意義について考え、「穴」のシリーズの背景について考察する必要を認める。

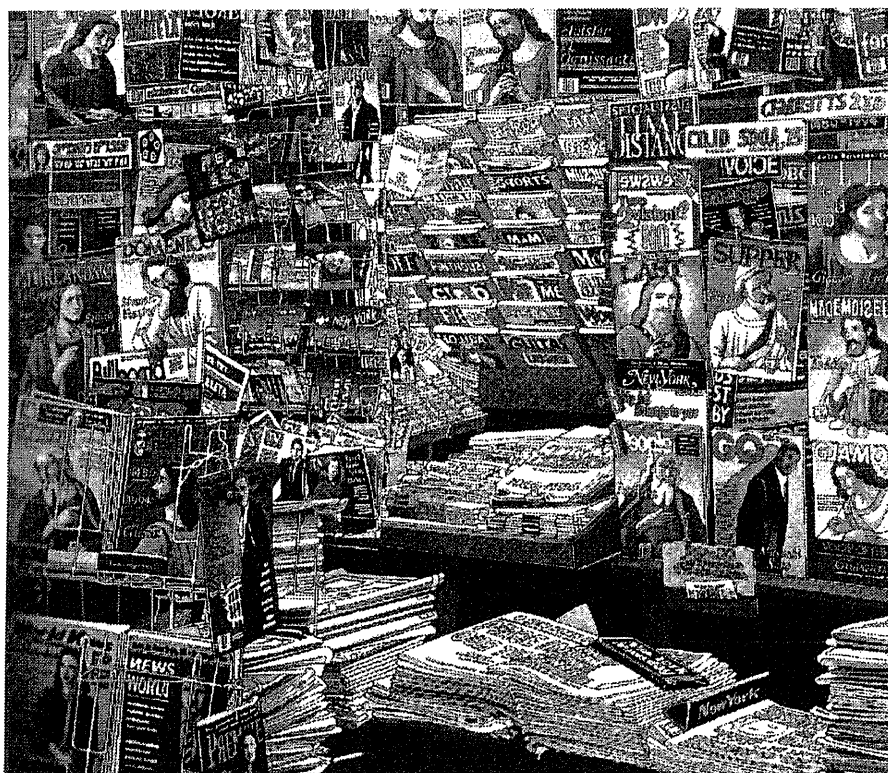
「穴」のシリーズの本質的な因子がイギリス時代にあることは、触れられてきたが、それはイギリス時代の表現と、ニューヨークに渡ってから十分に説明するものではないのである。これを鑑賞し、解釈する側も感覚的に了解しているに過ぎず、相互に暗黙の了解事項として十分に触れられてこなかったのである。しかしそのことは、これを仮説として論証する事にブレイキがかかったことを意味している。仮にわれわれの歴史の中、かつての作家として佐藤正明研究を行う場合、これはこの仮説の確証を得るために、美術史の常套として過去の文献を渉猟する。作家自身が語った記事が見出せない折には、このことを傍証資料（評論や記事）の積み重ねにおいて証明していかねばならないのである。ここに、作家の存在が重要な役割を果たし、われわれは同時代における現代作家研究の意義を見出すことになるのである。

註

- (1) 「佐藤正明・ニューヨークでの三〇年 1970-2000」、フジテレビギャラリー、二〇〇〇年九月四日―十月七日、カタログ『佐藤正明・ニューヨークでの三〇年 1970-2000』編集・発行 フジテレビギャラリー、二〇〇〇年九月四日



挿図1 Subway No.23 1979 アクリル・キャンバス 127×168cm



挿図2 Newsstand No.71 1994-5 油彩・キャンバス 147×173cm